湘南オープンウオータースイミング 2017

2.5 キロの部

第６位！

日本最大のオープンウォータースイミング大会『 ２.５キロの部 』出場。
エントリー者数１３１２人。完泳者７４２人
ゴールにたどりつけなかった５７０名はどこに消えたのか？
２.５キロを泳げない人は絶対このレースに参加しない。
ゆっくりならば５キロを泳ぐ事も充分できる人達である。たぶん。

前日に行われた10キロのレースでは３割のスイマーしかゴールをしていない。そんなに過酷なレースがあっていいのだろうか。10 キロのエントリー費は２万１千円と高額だ。２.5 キロは１万円。たぶん。

５キロ地点で半数の選手がタイムオーバーを宣告され、船に収容されている映像がドローンによって映し出されている。

寒さに震える人々は難民としか見えない。泳ぎを止められた瞬間から身体がどんどん冷えてくるのだ。風の強い海上で船の上に収容され人々は、ただ歯を食いしばって寒さに耐えるのみだ。

ここでのタイムオーバーの原因は何だろう？うねりと、潮の流れにコースを惑わされタイムロスを負う事になった事が考えられる。

ドローンから送られてくる映像には、大きなうねりが見てとれる。見ている

だけで船酔いがおきる。ウプッ。ゴボッ。酔いやすい人は、映像を見る時にはバケツを手元に用意しておこう。

下記の映像は５キロチェクポイントで停止させられたスイマー達である。
https://www.youtube.com/watch?v=e3NTGj80aZQ

つづいて、２.５キロの私のレース展開を見てみよう。
さすがにスイマー1312 人が同時にはスタートできないので、４つのグループに分けられる。
私の入る分類は６０歳以上、全女性、小、中学生、障害者。合わせて３００人近くが海岸から一斉にスタートする。
１キロ程の沖にセットされた黄色のブイを右に回る。ここからは遠すぎて目標の黄色のブイは見えない。
私はインコース側にスタート位置を取り、泳ぎだす。目標の黄色ブイまでの１キロを、３０分以内で回らないとタイムオーバーとなり、試合ストップが言い渡される。
しかし、スタートしたからといっても、すんなり泳げる訳ではない。
３００人がもみ合い、蹴り合いの格闘技を展開するのである。
毎回うんざりしながらの前半戦となる。
今年も例年どおり、スイマー同士の蹴り合いやら、つかみあいなど、もみくちゃの中で耐えがたきを耐え、ひたすら我慢しながら泳ぐ。
まるで台風の荒波の中をもがき苦しみながら、助けを求め泳いでいるようだ。スイマーにしっかり取り囲まれているので、横にも前にも出られない。
それなのに割り込んで入ろうとするスイマーがいる。
スタート時は、かなりの消耗を余儀なくされる。腕を伸ばし、水をかく手が、隣のスイマーの肩口に乗りかかる。大きく前にのばした手が、前を泳ぐスイマーの足をつかみ慌てて放す。
右のスイマーの手と、私の手が絡んで前に進めない。
毎年繰り返される苦行である。３００メートル程進むうち混雑が解消されてくる。はずなのだが。
今年は前後左右、挟まれたままどこまでも続く。前方のブイの確認よりも周りのスイマーの動向を監視しての歯がゆい泳ぎである。

こうした混雑を嫌ってアウトコースに位置取りをしたスイマーのご一行様が、大きくコースを外れ、制限タイムをオーバーしてアウトになったケースがあるから要注意である。
どのコースを通ろうとも、トップグループ以外のスイマーは地獄の通り道である。

以下にスタート時の地獄の映像があります。

https://www.youtube.com/watch?v=YWzPsab_6pw

そんな苦難を乗り越えてやっとの思いで折り返しのブイを回る。
この辺りからうねりが大きくなり、海で泳いでいる実感が漂ってくる。
少し離れたところにエイドステイションがあるようだがめんどうなのでパスをする。昨年飲み損ねた OS1 のことが頭をよぎったが笑って諦めよう。

さて、残り１キロのブイを右に折り返すあたりから、いよいよスイマーの姿もばらけてきた。人が多すぎるのも嫌だが、周りにスイマーの姿がないというのもいささか不安になるものだ。
ヘッドアップしてゴールを確認するも、はっきり確認できない。
左に男性、右前方に女性が泳いでいる
迷わずスピードの速い女性に接近、ぴったりマークして泳ぐ。左手の男性もコースの修正をして我らに接近。
女性を取り囲むように、三人の激しい競り合いが始まる。互いに寄っては離れ、前行くスイマーを一人追い越し、二人追い越し３人のペースがアップしてゆく。
自分ながら、まだこんなに余力があったのかと驚きながら水をかく手が早くなる。ずいぶん泳いで来たような気がする。そろそろゴールに近づいて来たか。
そう思ってからが長い。前方にゴールらしき目的のビルが見えているのだが、急げば急ぐ程ゴールが遠ざかって行くような気がする。
しかし、ここまで来るともう疲れは感じない。疲れの感覚はどこかに吹き飛び、機械のように手が前にでる。手の回転スピードは上がるばかりだ。「限界という言葉は破られる為にある」と思わせる局面がここにある。やがてゴールが近づいて来たようだ。
ギャラリーの歓声が砂浜から聞こえてくる。
だいぶ浅くなっているようだが、まだ立ち上がるには早いと自分に言い聞かせ、ぎりぎりまでスピードを落とさない。隣の女性スイマーが立ち上がる。
それでも私はまだ泳ぐ。泳ぎに取り付かれた猛者なのだから。
女性のスイマーを完全に追い越したところで立ち上がる。
雄叫びを上げながら砂浜を駆け上がり、ゴールラインをしっかり足で踏みつけ通過。おお！と叫びをあげる。知り合いは誰もいないので、恥ずかしさは全然ない。
ずいぶん早いタイムでゴールしたような気がする。OS1 を渡してくれるボランティアのお姉さんに現在時間を尋ね、あっと驚く。昨年より８分程遅いような気がする。
調子がいいと思ったのにどうしてこんなに遅いのだ。
目眩が私をおそう。テントのポールを握りながら「なぜ？」どこで遅れたのか考えたが分からない。地球上の全てが信じられない。時間と空間とがずれている。ボトルの水を一気に飲み干した。信じられる世界に戻りたい。

もう一本 OS1 お代わり！といいたいが、恥ずかしいのでそのまま帰ろうとすると、ボランティアのお姉さんが「昨年も参加されていましたよね？」と声を掛けて来た。隣にいたボランチィアの女性がが、ええ～どうして分かるのとビックリしている。私ってそんなにインパクトのある顔をしているのか！？

鏡があったら入ってみたい。そこには本当の自分がいるような気がする。迷宮の世界は神秘だ。一度入ったら病み付きになりそうな自分が怖い。

他人は何を見ているのか心配になって来た。

戦い終わり、２～３週間程過ぎた頃、ネットで順位を検索していると『年代別順位発表』が掲載されている。やはりタイムは大きく遅れている。全く嬉しくはないが７０歳以上の分類を見る。そして驚く事になる。

70 歳以上の完泳者---男子９人、女子５人。合計 14 人。

私は６位という事になっている。６位入賞なのだ。（何も頂けないが）

８０歳代のご老体はスタート時に紹介されていたが、制限タイム１時間３０分に間に合わなかったか？記録にない。残念。

今年の記録　１時間１５分２９秒６

昨年の記録　１時間０８分２９秒３８

う～む～これは喜んでいいのか。

６０代の完泳者数７１名→７０代完泳者数１４名

まるで生き残りゲームのようで辛いものがある。

あと１０年、生き続ければ、優勝がみえてくる。

これからの１０年はページをめくるように過ぎていくのだろう。

朝起きて、腰が痛い。靴下がうまくはけない。箸を時々落とす。そんな毎日が今後もつづくだろう。身体の部品はどんどん古くなってくる。大事に使わなくちゃすぐ壊れる。

ヒルトンホテルをはるかにしのぐ朝食を目指し、台所に立ち腕をふるう。フルーティで彩りの良いサラダ。朝食はアートだ。ブラジルの名品コーヒー「レッドブルボン」にお湯を注ぐ。テーブルへ。至福の時なのに、調理で腰が固まって痛い。テーブルの上に置いた珈琲カップに、手がなかなか届かない。朝は大変だ。それでも１日はあっという間に過ぎてゆく。

スイミングの大会が終わり２～３週間が過ぎた頃、妻がケーキを食べたいと言うので、家の近くのケーキ屋さんに向かった。

ケーキしか置いてないのに、ガラス越しに店を見ると、いつ覗いても客がいるのには驚きだ。人々は、甘い生活という言葉に踊らされているのだろうか。

先日のスイム大会６位という輝かしい成績もあるので、ご褒美もかねて一番小さいホールケーキを注文した。小さいホールケーキのくせにフルーツが一杯のっているのだ。

ショーケースからとり出した店員さんが「蝋燭はどうしましょう」と訊ねて来た。

驚いた私は「えっ。ここは呪いのような事もしているんですか！」叫びそうになったが、秘密めいた事かもしれないので、やや声を落として訊ねた。
やや戸惑いながら店員さんは「誕生日にお使いですか？」とボソッと答える。
そうか、歳の数だけロウソクを立ててお祝いする映画を見た事がある。と思いながらも、私の頭の中には、７０本のロウソクがケーキの上一杯に、乱立する姿から抜けきれない。美しく配置されたフルーツがめった打ちになっている姿は悲惨だ。しばし考え込んだ。
何を思ったのか店員さんは、「何かメッセージを入れますか？」と訊ねてくる「いいね～文字を書いてくれるの？長い文章になるよ～書ききれますかね～」とは言ったが文字を入れるのもやめた。
ケーキの上にチョコレートで言葉を書き入れるのも見た事があるが、長い文章をぐちゃぐちゃやられたらかなわない。短くてはおもしろくない。
ケーキを包み終えた店員さんが「お持ち帰りのお時間はどのぐらいですか？」と聞いてきた。質問の多いケーキ屋だ。
今度は時間の問題か？スイミングの事で頭が一杯の私は、家までの距離２００メートルを計算し、「泳げば４分で行けるでしょう」と答えたが、店員は何も言わずにケーキの袋を静かに私に渡して来た。
じつに不思議なケーキ屋さんもあるものだ。
以前から怪しいなと思っていたのだが無事で良かった。店を後にしてからも、宮沢賢治の「注文の多い料理店」を思いだしていた。
おお怖い。
エリンという作者の「特別料理」という短編がある。今でも思い出す。これを読んでからは怖くてレストランに入っても、特別においしそうな料理は注文できなくなった。できるだけ安い料理を注文するようにしている。
安心、安全が一番である。
今年も４月から１０月の台風到来まで６ヶ月間、毎朝海にでて１時間の泳ぎを楽しんでいた。
毎日泳いでいるにも関わらず、広い海に泳いでいるのは私だけ？
波がない日も荒れている日も、海岸付近はサーファーでびっしり埋め尽くされている。しかしスイマーを見る事はない。何故だろう？
大会が終ってからの海水温は高い。今年は暑い日が続いた事もあり１０月半ばになるというのに水温が上がったままだ。沖に出ても水温が下がらない。まるでお風呂のようだ。
誰もいない海を淡々と泳ぐうち、シーカヤックで釣りをしている人にぶつかりそうになり顔を上げる。釣り人に「ず～と見ていました。すごいですね！どこから泳いで来たんですか？」と驚かれ、釣り人が「さっきサメが近くを泳いでいましたよ、大丈夫ですか？」と心配そうに言うので、「大丈夫ですよ。ここのサメは噛んでこないから。いつも一緒に泳いでいるから。」と答えると、「へ～そうですか」と変に納得されてしまった。
先日、獰猛君と私が呼んでいるゴールデンレドリバー犬を連れて散歩してい

るご近所さん達と、立ち話をしていた時のことである。私だけが蚊に刺され、ひゃ〜ひゃ〜騒いでいるのに、他の人は誰も刺されないのである。

海で泳いでいる私の話しに変わり、「今年もクラゲに刺されてヒャアーヒャア騒いでいる人が多かったです。ですが、私は海では刺されないですよ。海の生き物とは同化しているのか魚や、鳥達も近寄ってくるのですよ」と話題を投げかけた。

「先日、サメと出会って、背びれが手に届く程すぐ横にきたので、思わずサメの身体を小脇に抱えてしまいました。サメはスピード結構ありますね〜」と話しながら、海を疾走する自分とサメの姿を、分かりやすくジェスチャーを交えて話しを続けていると、「えっ〜本当ですか！うそでしょう！」と素っ頓狂な声を上げるので。「うそです」と間髪を入れず答えておいた。

獰猛君のお母さんは、おかしな人だ。

さすがにサメはつかめない。それはない。これはもののたとえである。

いかに私が海に親しんでいるかを、簡明に表現したかっただけである。

でも、以前にテニアン島の海のことである。珊瑚礁の中を泳いでいると、大きな亀が私を誘うように私のお腹の下に入り込むように接近して来た。

亀が竜宮城へ私を誘導する姿に現実とは思えず、目眩を覚えたしたことがあったのだから、油断はできない。

人知を超えた事がこの世界では日々起きている。

夏の終わりにはこんな事もあった。海上で泳ぎを止め、立ったままうねりに身をまかせて浮いていると、波の向こうからうねりに合わせ１羽のカモメが静かに近づいて来た。

まさか私にぶつかる事はないだろうと思ったが、がどんどん接近してくる。人間同士であっても、気づいた時点でそれなりの距離をとるものだ。そろそろ避けるだろうと思って見ていた。

鳥の集団が電線につかまりながらわいわい騒いでいるときでも、その間隔は見事に一定の距離を保って並んでいる。それが自然の行為というものだ。

無意識のうちにも、距離を正確に測定できる彼らのことだから、今置かれている状況からやがて大きく離れていくだろうと思っているのだが、見開いた目のまま、さらに私に接近して来る。カモメの目も身体も、微動だにしない。

真っすぐ沖を見据えたままだ。このまま進んで来るとぶつかるのではないか？と思ったが、まさかそれはないだろう。少し緊張が走る。

なぜ、避けようとしないのだ？

さらに接近。１メートル以内に入って来た時、この鳥は私のことをどう思っているのだろうと、ふと考えた。波間にさまよう浮遊物、ゴミ？置き物、人間廃棄物？

やがて、目の前 30 センチ。私の手が水の中で鳥の足をつかめそうだ。息をのむような瞬間がおとずれた。お互い波のうねりの中、うねりの周期は同じ。カモメが目の前をゆっくり通り過ぎていく。カモメに泳いでいる様子はないのにどうやって沖に向かって進んでいるのだろうか？ゆっくりと離れていく。

やがて沖に消えていった。

泳ぎの大会から１０年の日々が鳥の泳ぎのように静かに目の前をとおり過ぎていった。
泳ぐことがたのしい。いろんな魚が泳いでいる。クラゲが海の中にごろごろいる。それでも水の中がたのしい。
秋の訪れと共にランニングの練習が始まる。次はマラソン大会だ。
今年の海は、全ては忘却の世界である。
こうした海でのいろいろな生きものと過ごした１０年。
１０年のスイミングの大会のなかで『第６位』は生み出された。まさに年齢との戦いで勝ち得た記録だった。